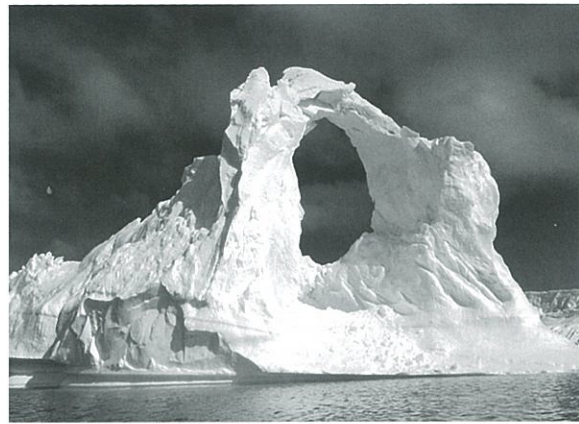




南極に行ってきました!

東京支部
テルヤ電機株式会社 代表取締役社長 江川 和宏



冰山

「南極って普通の人でも行けるんですか?」「初めて南極に行ったという人に会いました」「どうやって行くんですか?」「どのくらい寒いんですか?」…そう、「南極に行ってきました」と話した時のみなさんの反応です。

2018年2月に、16日間の行程で南極旅行に行ってきました。世界最後の秘境といわれる南極大陸ですが、私のような普通の人でも行ける時代になりました。南極大陸は南極条約によりどこの国の領土にも属していませんので、パスポートは必要ありません。自然環境保護の観点からホテルやレストランはありませんので、客船でのクルーズによる周遊旅行に限定され、宿泊は船内ということになります。

南極大陸はマイナス何十度の極寒の地というイメージですが、南半球なので季節が逆の夏であるということはありませんが、それほど

寒くはありません。マイナス2℃からプラス5℃くらいの間なので、東京の寒い日と変わりません。

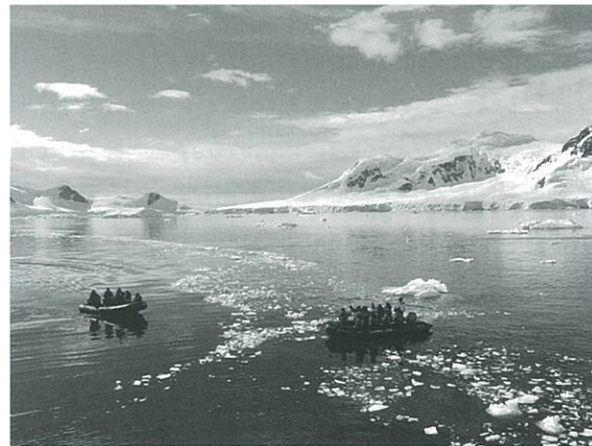
問題は日本からの距離です。今回は、成田からニューヨーク～サンチャゴ(チリ)～ブエノスアイレス(アルゼンチン)と、ここまで飛行機を乗

り継いで35時間。ようやくブエノスアイレスのホテルで1泊して、翌日はまた飛行機で南米大陸の最南端の街、ウシュアイアまで6時間。ここから客船に乗り換えて、南極大陸までは40時間。結局、成田を出発してから南極大陸に到達するまで4日半、地球はデカイなど実感しました。

ここからの南極クルーズは、実質7日間。客船で移動しながら、南極大陸や周辺の島々に1日2回の上陸を楽しみます。天候により上陸できなかったり、日によっては「ゾディアックボート」(Zodiac Boat、エンジン付きの小型ゴムボート)で冰山の間をクルーズしたりもします。

南極大陸に近づくと突然、船長から、「一番最初に冰山を見つけたお客さんに、シャンパン1本プレゼントします」と船内放送が入り、ゲームスタート。お客さんたちはデッキや客室から双眼鏡片手に大海原を探しますが、なかなか冰山らしきものは見つけられません。

結果は、数時間後に年配のご婦人が発見。粘り勝ちでした。夕食時にみなさんの前でプレゼントされて、船内は南極大陸上陸に向けて盛り上がりました。



パラダイスハーバー



ゾディアックボート

翌日、いよいよ南極大陸が船の目の前に迫ってきました。「人が住んでいないと自然はこんなに美しいのか」というのが、南極の第一印象です。人工物が視界にひとつもないという、ある意味不自然な景色は非現実的であり、例えようなないスケール感に圧倒されてしまいます。鯨のダンスや潮吹き、ペンギンの高速スイム、冰山の上でのアザラシの昼寝。どれも動物園で見るそれとは別物で、生まれて初めて見る光景に興奮が止まりません。

南極には3つの色しか存在しません。白と青と茶色です。白は氷の白、青は空と海、茶色は台地の土の色です。その3色が日により、時間により、場所により、刻々と変化していく様子は、まさに芸術そのものです。特に南極クルーズ1日目に訪れたパラダイスハーバーは、天国のように美しい世界が広がる湾と言われており、波のない海面に映し出された光景と重なって、息を呑む素晴らしさでした。人生で初めて「息を呑む」というのはこういうことかと実感しました。写真ではそのスケール感がまったく伝わらないのが残念です。

南極には港がありませんので、大陸に上陸するときには、10人くらいが乗れるゾディアックボートに乗り換えて上陸します。上陸地



ジェンツーペンギン

のほとんどはペンギンの営巣地なので、ペンギンたちの住処にお邪魔するという感じです。人間は限られた場所しか動き回ることができませんが、ペンギンたちがヨチヨチ歩きでこちらに近寄ってきます。もちろん触ったり餌をあげたりはできませんが、近くで見ると野生のペンギンはとても可愛いものです。営巣地には数万羽のペンギンがいるようで、そのスケールも想像以上です。

一方、客船内の生活は極めて快適です。三食昼寝付き、ベランダからは冰山や広大な景色が視界いっぱい広がっています。船籍はフランスなので、ワインは飲み放題。アルコールやソフトドリンク、食事も全て旅行代金に含まれているので、気兼ねなく楽しめます。

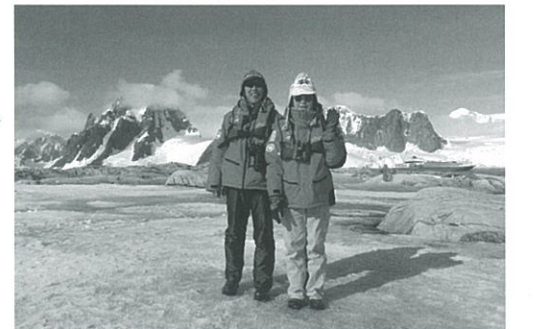
夜は、専門家の方々がその日の振り返りを写真やビデオを交えて説明してくれたり、南極大陸の生い立ち、ペンギンの生態、南極の氷などについての勉強会も開催されます。また、夕食後にはフレンドリーなスタッフによるショーも連日開催されて、飽きることがありません。

気軽に行ける場所ではありませんが、一生に一度、見るべき価値のある場所であることは間違いありません。今回の旅行を通じてそう感じました。

皆さんもぜひ、機会を作って南極に足を運んでみてはいかがでしょうか。私たちの住んでいる地球の素晴らしさを実感できると思います。



夫婦で記念撮影①



夫婦で記念撮影②